Q1　杭州フィルへの入団の経緯、きっかけをお話しいただけますか。

A. 愛知県立芸術大学に入学したときからオーケストラに就職することが私の目標でした。学部卒業後、桐朋オーケストラアカデミー、愛知県立芸術大学大学院と進みましたが、オーケストラに就職したいという目標は、その間、何度オーディションに落ちようとブレることはありませんでした。そんな中、大学4年生のときに受けたアジア ユース オーケストラ（以下AYO）のオーディションに合格することができ、そこから私とAYOの関係が始まりました。アジア各国から若く優秀な演奏家が一堂に会し、二週間のリハーサル、およそ１ヶ月のアジアツアーを通してたくさんの刺激を得ることができました。私は通算3度（2006、2007、2010年）AYOに参加しましたが、

 その中である変化を感じました。

 初めて参加した2006年、日本人の参加者は他の国々に比べて多く、各パートの首席はほぼ日本人が独占していました。それが2010年になると、参加者の数、首席ともに日本以外の国々の割合が高くなりました。とくに、中国の参加者たちのレベルの高さにショックにも近い衝撃を受けたのを覚えています。その頃から、徐々に中国のオーケストラにも興味を持つようになりました。そのとき知り合った中国の参加者たちが創立まもない杭州フィルの存在を教えてくれ、またオーディションを受けるよう勧めてくれたことが、今の仕事へとつながっています。

Q2　杭州フィルの活動状況は

 私たち杭州フィルは、全ての演奏会を含めると年間約70回のコンサートを行っています。その中にはシーズンコンサート、依頼公演、また普及音楽会と呼ばれる日本の音教のようなコンサートがあります。

 今年は杭州フィル10周年にあたり、プログラムもマーラー、ブラームスの全交響曲など非常に内容の濃いものになっています。今シーズン個人的にとくに期待を寄せる指揮者・ソリストとしては、指揮者のエド・デ・ワールト、ラン・シュイ、ヴァイオリンのレオニダス・カバコス、シュロモ・ミンツ、チェロのヨーヨー・マなどです。

 日本では音教を通じて子どもたちと触れ合う機会が多いですが、上述の普及音楽会は対象が主に大学生や大人なので、今後子どもたちを対象とした音楽会が増えていくことを期待しています。

Q3　杭州フィルの特徴は？　（他のオケとは違う点？）

 杭州フィルは今年で創立10年目のオーケストラであり、オーケストラのメンバーもほとんどが20代（30代手前）と、中国国内では比較的新しいオーケストラと言えます。私を含め、ほぼ全ての楽団員が3年前後の契約団員なのでその周期に合わせてメンバーの入れ替わり（10人前後）があります。対外オーディション以外に、毎年2回ほど楽団員に対するオーディション形式の試験が課されます。

 また杭州フィルはドイツのベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、アメリカのフィラデルフィア管弦楽団などと交流があり、毎年それぞれのオーケストラから数名のゲストを協奏曲のソリストとして杭州に招き、一緒に演奏することができます。ゲストのスケジュールが合えばマスタークラスが開催されることもあります。一番近いところでは今年の6月にベルリン・フィル　コンサートマスターの樫本大進さんがいらしてくださいました。また夏と冬の年2回、楽団員の中から4,5人が選抜されベルリンにて約1ヶ月の研修を受けることができます。中国の急速な経済成長を象徴する非常に勢いのあるオーケストラの一つと言えます。

Q4　入団以来、最も印象に残っているコンサートは？

 2011年から7年間、数多くの演奏会を杭州フィルとともに経験してきましたが、やはり今回のアジア　オーケストラ　ウィーク日本公演が自分の中で最も印象に残るコンサートになりました。自分の演奏を家族に聞いてもらうことができ、今までずっと支えてもらってきた分、色々と込み上げてくるものがありました。

 それ以外で個人的に印象に残っているコンサートをあげるとすれば、ベルリンフィル首席ホルン奏者シュテファン・ドール氏と共に演奏したマーラーの交響曲第5番です。私は音楽家というより若干ホルンマニアなところがあって、あのときはドール氏が1番ホルン、私は5番ホルンを担当していたこともあり、ドール氏の演奏（音）をベル元で堪能することができました。

Q5　杭州フィル以外の音楽活動は？　他楽団へのエキストラ出演、録音、室内楽。リサイタル、教える仕事、ボランティア活動などなどあれば

私たち杭州フィルホルンセクションは、ゲスト首席奏者を除くと通常5名で活動しています。その中で私は副首席奏者を担っていることもあり、年間を通して基本的に降り番はありません。録音や室内楽の仕事も基本的にはオーケストラを通して依頼がきたものをこなしています。もう少し自由になる時間があればな、と時々思うこともありますが、演奏会のプログラムにチャレンジングなものが多いので、それはそれで楽しんで取り組めています。

 また、機会は少ないですが他楽団へのエキストラ出演、友人主催のパーティーでの演奏など楽団外での活動も行なっています。

 教える仕事に関して（あまり詳しくないので不正確かもしれませんが）中国の小学校や中学校では特殊活動に対する成績の加点があり、音楽も特殊活動に含まれるため、それぞれ試験シーズンになると楽器の生徒が急増します。しかも一週間に一度などという具合ではなく、毎日レッスンに来たりするような生徒もいます。個人的にはそのような方法はあまり賛同できないのですが、ある種、私たちが試験直前の駆け込み寺のような役割を果たしており、中国の特徴的な指導形態の一つと言えるでしょう。

Q6　杭州の街は住みやすいですか？

 個人的にはとても住みやすいと思います、また私が杭州に来てからの7年間でよりいっそう住みやすくなったと言えます。住みやすくなるということはそれに伴い、家賃、物価の上昇も著しいということです。とくに2016年9月に杭州で開催されたG20サミットを境に杭州の中心部は大きな変化を遂げました。道路はより広くきれいに整備され、地下鉄も以前は1路線しかなかったものが今では3路線に拡充されました。今でもまだ地下鉄の工事は続いていて、2022年のアジア競技大会までに10路線まで拡充する計画のようです。私は地元が宮城県仙台市で、今でこそ地下鉄は2路線（南北線と東西線）ありますが、東西線拡充の計画を初めて耳にしたのがおそらく自分が高校生の頃で、2015年に開通したわけですから、1路線拡充するのにおよそ15年かかったことになります。そう考えると2011年から2022年の11年間で9路線拡充しようとする杭州地下鉄の計画は、いかにハイスピードで進められているかがお分かりいただけるかと思います。

 物価に関しては、例えば食料品はもともとが非常に安かったので多少値上がりはしましたが許容範囲内、といったところでしょうか。家賃に関しては私の住んでいる今のアパートがG20を境に1000元（日本円で約16000円）値上がりしました。不動産に関して、値上げは全て大家さんに決定権があるので、地方からどんどん人が集まり、住み手が溢れかえっている杭州では家賃も上げ放題というのが現状です。楽団から一定額住宅補助も出ますが、こちらで生活する上で今もっとも悩ましい問題の一つです。

 また電子決済サービスが非常に普及しており、今現在杭州で現金を使用する機会はほぼありません。個人的には非常に便利だと思っています。

 中華料理というと日本人にとっては四川料理に代表される辛い料理、また油を多く使った料理を思い浮かべる方が多いと思いますが、杭州料理は辛い料理が少なく、味も薄味、どちらかというと甘じょっぱい味付けのものが多いのが特徴です。ドンポーロウという沖縄のラフテーに似た杭州の名物がありますが、甘辛い味付けがご飯のお供に最適です。

 経済の発展に伴い、芸術は杭州の人々の生活においてより身近な存在になりつつあります。演奏会に足を運んでくださる方々も年々増えてきました。2016年には杭州に音楽大学が設立され、市内には音楽教室がどんどんオープンしています。楽団の中にも、たくさんの生徒をかかえる楽団員が相当数います。

 2017年からは杭州で国際音楽祭が開催されるようになり、杭州フィルもホストとして毎年参加しています。杭州を訪れる世界一流の楽団も多くなり、楽団外からの刺激も多く受けられるようになりました。

Q7　近隣の中国のオーケストラ、アジア諸国のオーケストラ、音楽家との交流はありますか。

中国国内でみると私たち杭州フィルは中国フィル音楽監督の余隆（ユー・ロン）氏を中心に中国フィル、上海交響楽団、広州交響楽団、深圳交響楽団などで形成される大きなグループに属していると言えます。シーズンコンサートなどでエキストラが必要な場合は、大体が前述のオーケストラから招かれます。

 昨年、2017年10月には20周年を迎えた北京国際音楽祭を記念してマラソンコンサートと題し、前述のオーケストラに加えて国内から合計9つのオーケストラが北京に集い日替わりでコンサートを行いました。最終日には抽選で選ばれた各オーケストラの代表によるフェスティバルオーケストラが組織され、マラソンコンサートのフィナーレを飾りました。

アジア諸国のオーケストラでみるとシンガポールの杨秀桃（Yong Siew Toh)音楽学院との交流の延長線上にシンガポール交響楽団との関わりが深いように感じます。木管楽器を中心にシンガポール交響楽団からゲスト奏者が招かれています。

Q8　杭州フィルに長く在籍できた秘訣、秘密は？中国語の習得は難しかった？

 もともと、日本を離れて一度違う国で生活してみたいという願望は、この仕事に関わらずずっと心のどこかにありました。日本が島国ということもあり、いつからか自然と、日本の常識は本当に世界の常識なのだろうかということに疑問を持つようになりました。またこんなに近いのに、具体的な情報がなかなか入ってこないこの中国という巨大な国に好奇心のようなものがあったことも事実です。幸い、この２つの欲求を同時に満たす場所で仕事ができているのは、もはや何か運命的なものがあったのでは、とすら感じてしまいます。

 私が中国にきて、最初に困ったのはやはり語学でした。事前の語学学習一切なしでいきなり中国に飛び込んだので、楽団のメンバーとは英語でやりとりができましたが、こと日常生活においては英語が通じない場面が多々あり、旅行用の中国語集を片手に言いたい文章を指差して、あれがほしい、ここに行きたい、などとジェスチャーを交えてなんとか生活していたのを覚えています。ある程度勉強してみて気づいたのは、文法的にはさほど難しいものがないこと、また多少の違いはあっても同じように漢字を使うので発音できなくとも意味は大体想像できる、ということです。反対に、勉強すればするほど、発音の大切さ・難しさを思い知らされます。

 中国にきて最初の３ヶ月くらいは、やはり戸惑うことが多くありました。それはもちろん、語学の不自由さ、というのもあったでしょうが、習慣、やり方、考え方の違いによるストレスのほうが大きかったと思います。それは日常生活に限らず、オーケストラの中でも同じでした。常に（日本だったら....なのに）という考えが頭の中をグルグル回っていました。そんなときにふと（ここは日本じゃないんだから、もう日本と比べるのはやめよう、こういうもんだと受け入れてみよう）と思えたのが、今日まで中国で、このオーケストラで活動できている一番の秘訣のように感じています。もちろん杭州フィルは素晴らしいオーケストラですし、同僚も非常に親切で居心地がよいというのもありますが、やはりあのときすっと考え方を転換できたのが大きかったな、まさに「郷に入っては郷に従え」だな、と痛感しています。

Q9　最後に、オーケストラの音楽家を目指して、音楽大学を卒業されてくる若者たちへ中国を挑戦の場所として選ぶことへの可能性、アドバイスなどがあれば。

日本にいて耳にすることのできる中国国内の情報には限りがあり、またどちらかといえばネガティブなものが多いように思います。かつての私もそのような限られた情報を鵜呑みにし、勝手な中国像を頭の中で作り上げていました。しかし、アジア　ユース オーケストラを通じて、また中国に身を置き杭州フィルで演奏活動する中で、実際に自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の肌で感じた中国、また中国の人々というのはやはり想像していたものとは異なっていました。当たり前ですが、中国には中国の良いところ・悪いところがあり、それは中国に限らず日本でもどこの国であっても同じなのです。そう思えさえすれば、中国を挑戦の場所として選ぶのは決して悪い選択ではないと思います。 現在、中国のオーケストラの待遇は、経済の発展、文化レベルの向上に合わせてどんどん改善されてきています。私たち杭州フィルも今回の日本公演含め、海外公演を通して、また杭州を訪れる世界一流のオーケストラ、ソリストたちから演奏面はもちろん、それ以外にもオーケストラの運営、管理などたくさんのことを学んでいます。日本人の若く優秀な演奏者たちが満足いく待遇を獲得できる日もそう遠くないかもしれません。学生時代、一つ上の先輩から言われた言葉が強く印象に残っています。

「どこでやるかじゃない。（与えられた場所で）どうやるかが大事だ」

私自身はあまり偉そうなことを言える人間ではないのですが、先輩がおっしゃるように、自分の目標に向かって何をどうすべきか考え、必要な選択をする、周りに流されず、自分が正しいと思える道を最後まで歩み通す、そういった姿勢で取り組んできたからこそ今の自分があると思っています。今、オーケストラ奏者を目指して頑張っている皆さんがいつの日か、自分の居場所を見つけられることを切に願っています。

**太田直喜♪**

愛知県立芸術大学音楽学部および大学院音楽研究科卒業。桐朋オーケストラアカデミー研修課程修了。これまでにホルンを山本大、須田一之、守山光三、大野良雄、猶井正幸、川瀬貴子の各氏に師事。2006,2007,2010年アジア ユース オーケストラ、2010年小沢征爾音楽塾オーケストラにそれぞれ参加。2011年11月より中国の杭州フィルハーモニックオーケストラ副首席ホルン奏者を務める。